

病理学者、 原子野を



ゆく

—広島大学医学部教授・

玉川忠太の原爆症への挑戦—

(広島大学医学部所蔵資料

および原爆放射線医科学研究所所蔵資料より)

※当時の玉川は広島大学医学部の前身である広島医学専門学校の教授でした

2018年

8/3(金)~9/20(木)

広島大学医学部医学資料館

10:00~16:00 (土曜日・日曜日・祝日・夏季休暇日閉館)

広島大学雷キャンパス (大学病院前)

特別協力 広島大学大学院 医歯薬保健学研究科 分子病理学研究室

共催 広島大学原爆放射線医科学研究所

広島大学医学部

放射線災害・医科学研究拠点 (広島大学・長崎大学・福島県立医科大学)

企画・製作

広島大学原爆放射線医科学研究所附属被ばく資料調査解析部

ごあいさつ



本日はご来場いただきまして誠にありがとうございます。

広島大学のルーツは明治時代にさかのぼることができ、広島「高等教育」の場として、また「学術研究機関」として現在もその使命を果たすべく尽力しております。1949（昭和24）年を出発点とする戦後の広島大学は、来年は70年を数えることとなります。

そのなかで重要なのは、やはり原爆とのかかわりです。これは被爆地にある大学の使命です。そして、それを象徴的に表しているのが、このごあいさつの冒頭に掲げた大学のシンボルマークです。このフェニックスの葉をモチーフに掲げた学章は1956（昭和31）年に制定されましたが、そこには自分の身を焼いてできた灰の中から新たな生命をもって蘇るといわれるフェニックス（不死鳥）のエピソードに、原子野から立ち上がり復興する広島と、そこに新たに生まれた大学を重ね合わせています。そして今回は、その厳しい原子野を切り開くように原爆症に立ち向かった広島大学医学研究者・玉川忠太の足跡をご紹介しますと思います。

なお、末尾ながら、本展示にあたりまして、多大なご協力を賜りました広島大学大学院医歯薬保健学研究科 分子病理学研究室安井 弥教授、並びに関係各位に篤く御礼申し上げます。

広島大学 原爆放射線医科学研究所所長
松 浦 伸 也

展示について

皆様、ようこそお越しくださいました。

1945年8月6日に投下された原子爆弾は、広島、生きる人々による生きる社会を消しました。「放射能に汚染された広島は、70年あまりは草木も生えない」という言葉は、マンハッタン計画（アメリカの原爆開発計画）に関わったハロルド・ジェイコブソン（H. Jacobson）博士の、1945年8月8日のワシントン・ポスト紙に掲載された談話（“Radioactivity from the atomic bomb would be fatal to anyone entering Hiroshima for a period of seventy years.”）がもとになった言説です。これが誤りだったことは私たちはよく知っていますが（彼もまた直後に否定したそうです）、しかし、当時の広島で生き抜いた皆さんの目の前には、その言葉が本当のことのようにしか感じられない原子野が広がっていたことでしょう。

しかしその「原子野」は不毛ではなく、そこに立ち向かい、生き抜く人々がおりました。また、この未曾有のできごとを解明すべく、力強く、頼もしく、ずんずんと原子野を進む科学者もいました。今回はその一人である玉川忠太先生原爆症に挑む姿の一部をご紹介しますと思います。今の私たちの広島社会は、こういった人たちの活動の延長線にあります。小さく未熟な展示ではありますが、そんなことを少しでも感じていただけたら幸いです。

広島大学 原爆放射線医科学研究所
附属被ばく資料調査解析部

玉川忠太



西暦（和暦）	できごと
1897（明治30）	兵庫県神戸市に生まれる
1920（大正9）	岡山医学専門学校卒業。岡山医学専門学校病理学教室に入り田村於菟に師事。
1940（昭和15）	岡山医科大学助教授に就任。
1945（昭和20）	6月、広島県立医学専門学校教授に就任。病理学教室の初代教授となる。
1945（昭和20）	8月27日に広島通信病院を訪問。 以後、ここで貴重な初期の病理解剖を行う。
1948（昭和23）	3月、大学の昇格に伴い、広島県立医科大学教授に就任。
1952（昭和27）	広島医科大学教授に就任。
1953（昭和28）	広島大学との統合により、広島大学医学部教授に就任。
1956（昭和31）	広島大学附属図書館医学部館長（～1958（昭和33）年）
1961（昭和36）	3月、定年退官、広島大学名誉教授となる
1970（昭和45）	10月30日、広島大学病院にて逝去

出典：『広島大学医学部病理学第一講座開講50周年記念誌』広島大学医学部第一病理同門会、1997年7月、など参照

蜂谷（ハチヤー）、
今日、県庁へ行った
らのう、解剖さんと
とイヤーガッテ、ヒ
デー野郎が、馬鹿だ、
馬鹿にもほどがある
…解剖さんという
理由がどこにあるか、
そうじゃろうが、阿
呆じゃ、病理解剖セ
ンデ何がわかるか、
のう、お前、そう
じゃろうが、のう

1.玉川忠太、逋信病院へゆく



被爆より間もないころの蜂谷道彦
蜂谷道彦『ヒロシマ日記』朝日出
版社、1962年、所収

左は、蜂谷道彦の『ヒロシマ日記』に玉川忠太が初登場のときの彼のセリフである。1945（昭和20）年8月27日、原爆投下からまだ日の浅い、不安と混乱の真ただ中の広島逋信（ていしん）病院（以下、逋信病院）に彼は来た。自らも被爆し重傷を負いながら、院長として、医者として、そして医学者として、多くの被

爆者を受け入れて苦難の日々を送っていた蜂谷道彦にとって、大学の大先輩の登場は、心強く頼もしかったに違いない。それはこのセリフの、尊敬と親しみと愛情のこもった表現からも感じることができるだろう。この玉川の問い掛けに、蜂谷は「**有難い、何日でもいて下さい、解剖せねばわけがワカリヤーセン**」と応じる。つまり彼らは、無許可で病理解剖を決意するのだ。そこには、原爆症究明のためには「今こそ」すべきことがある、という医学者としての使命感と、病院に、また広島にあふれる被爆者への医者としての思いが強くあったと考えられる。

ちなみに、玉川に「**馬鹿だ」「阿呆じゃ**」と散々だった「県庁」とは、県の衛生課長・喜多島健磨を指すが、彼もまた玉川、蜂谷と同じく岡山大学医学部出身である。彼は原爆投下直後から逋信病院の援助をしていたから、この玉川のセリフはいささか気の毒かもしれない。



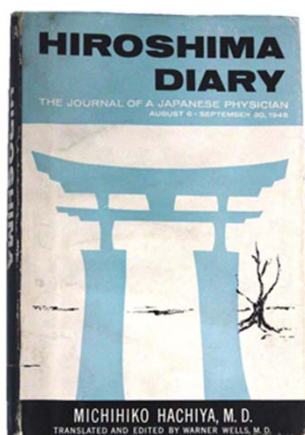
著書刊行時の蜂谷道彦
同上、所収

2. 蜂谷道彦と『ヒロシマ日記』

『ヒロシマ日記』の著者である蜂谷道彦（1903～1980）は、岡山県に生まれた。旧制第六高等学校から岡山医科大学（現在の岡山大学医学部）に進み、卒業後は同大学の第一内科に入局、稲田進教授のもとで研鑽を積んだ。1942（昭和17）年、逓信病院の院長として彼は広島に赴任。そして、被爆した。

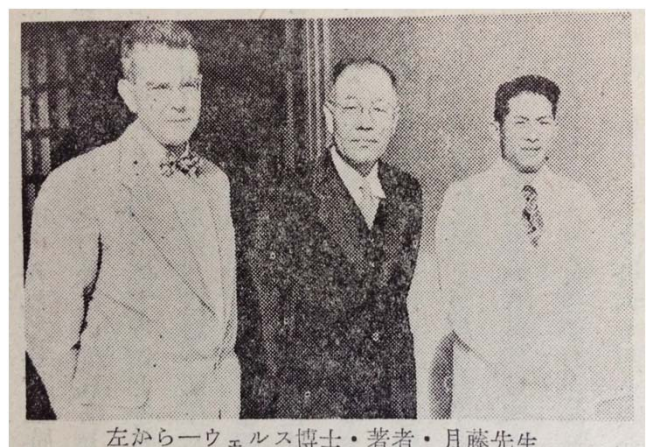
蜂谷は8月6日のその日から日々メモを残した。そしてそれをもとに1950（昭和25）年、『逓信医学』に「広島原爆雑話」と題して連載を始めた。これがのちの『ヒロシマ日記』となる。

このとき、ワーナー・ウェルズ（Warner L. Wells, 1913～1991）がこの連載に目を留める。彼は広島のABCC（原爆傷害調査委員会、現在の放射線影響研究所）の外科医顧問であり、のちには広島医科大学（現在の広島大学医学部）の名誉教授にもなった。ウェルズは、同じくABCCに勤務していた月藤春雄（Neal H. Tsukifuji, 1923～2012）とともに蜂谷に申し出て翻訳に着手した。そして原爆から10年目の1955（昭和30）年、『ヒロシマ日記』は日本語版より先に**“Hiroshima Diary”**としてアメリカで刊行された。そして、英語だったことで世界中で読まれて大ベストセラーとなる。現在でもアメリカの大学（医学部）の講義で言及されると聞く。



（左）アメリカで刊行された**“Hiroshima Diary”** 下書きの英文タイプ原稿をアメリカに持ち帰ったウェルズは、当時の自身の勤務校であるノースカロライナ大学でこれを刊行した。

（右）日本語版『ヒロシマ日記』に掲載されている3人の写真



3.玉川忠太、解剖室を建てる

8月28日…玉川教授のために病理解剖室を作らねばならぬ。…生来野人の玉川先生はその本性を発揮して大工、土工になって学生や事務の者と一緒に一日がかりで好みの解剖室を建設した。玉川先生は眼中部屋の良否などなく一刻も速やかに症例をつかまえ病理解剖がしたいばかりのようだった。

これは玉川が逋信病院に現れた翌日の『ヒロシマ日記』の記述であるが、私たちは今それを映像で確認できる。その画像が以下の2枚の写真である。当時の状況からすれば立派なものである。



(左) (右) 原爆記録映画「広島・長崎における原子爆弾の影響」より「逋信病院に建てられた解剖室」『ヒロシマ日記』によれば、もともと原爆投下直後に工兵隊が建てたバラック小屋を「改築」したようである。左の画像、解剖室の後ろに写る建物が逋信病院。本画像は広島大学原爆放射線医科学研究所に残された映像より作成。

玉川は同窓で旧知の眼科医・小山綾夫が死んだと聞いて逋信病院を訪問したが（実際は玄関で本人が出迎えて驚いたという）、一方、原爆直後から、被災を医学者としてとらえ、その特異な症状から緊急の病理解剖の必要性を感じていた。例えば、県庁の喜多島課長とは原爆投下直後に広島に戻った際にも論争した。そして再び喜多島とやりあった翌日、解剖室を自ら作った。先のセリフと併せれば、この玉川の行動力と迫力には驚かされる。

4.玉川忠太、病理解剖に挑む

8月29日…玉川先生の仕事ができる。私は病院の裏口をでて蠅のわんわんいう中を解剖室へ行ってみた。玉川先生は挨拶代わりに、ワッシャーエートケーキタノー、ハッチー、徹夜してでもやるよ、デエーロシヌノ。

蜂谷道彦『ヒロシマ日記』より

病理解剖は、解剖室「建設」のすぐ翌日から始まった。のちに『原子爆弾災害調査報告集』で報告される初期の貴重な19例の解剖は、全てこの逋信病院で行われた。ここでの解剖は、玉川だけでなく、逋信病院の医師のほか、岡山医科大学から救援にやってきた医学生も手伝った。



原爆記録映画「広島・長崎における原子爆弾の影響」に見る「解剖室内部」 左が玉川忠太。1945年秋ごろ、ある解剖後の様子とされる。本画像は広島大学原爆放射線医科学研究所所蔵映像より作成。

九月二十日、黒くすすけ、ガランとした逋信病院の病室で、折り重なるようにあふれていた被爆者の一人から八ヵ月の早産児が誕生しました。だがそのような児が生き長らえる条件は全くありません。解剖は夜の九時過ぎに終わりましたが、翌朝、三十九歳になる衰弱しきったその母親もまた、解剖室へ運ばれてきました。戸口までついてきた夫は、眼にいっぱい涙を溜めながら、小学校三年生ぐらいの男の子に「さあ、お母ちゃんにさようならをなさい」と言って子どもに合掌させ、自らも深く頭を垂れて手を合わすのでした。 杉原芳夫「病理学者の怒り」より（山代巴『この世界の片隅で』岩波新書566、1965年、所収）

これは解剖に立ち会った、当時岡山医科大学の学生であった杉原芳夫（のち広島大学病理学教室に所属）の記述だ。玉川の解剖の外側にはこういう風景が広がっていた。これらも背負って原爆症に挑む玉川たちは、まさに、いくつかの意味での「原子野」をゆく病理学者であった。

5.玉川忠太、『魔の遺産』に登場する

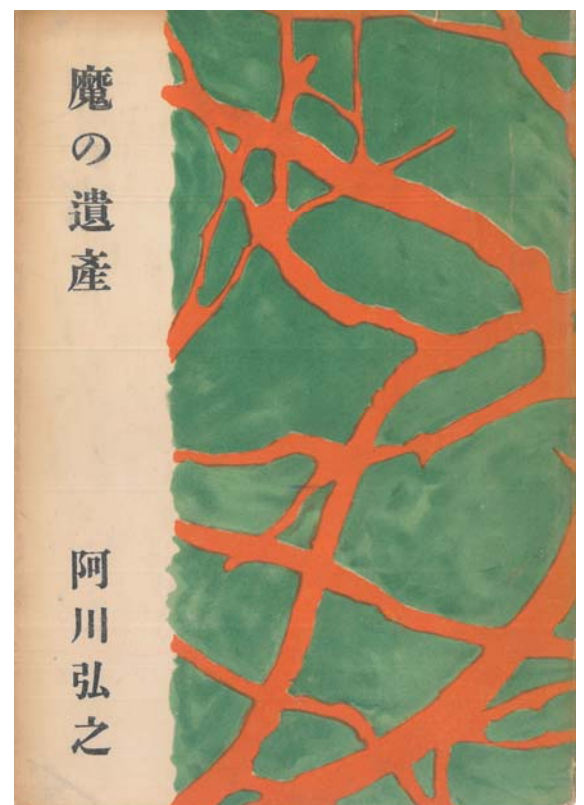
1920年、広島市白島に生まれた作家・阿川弘之は、『山本五十六』、『阿房列車』など数々の名作を生み、2003年には広島名誉市民となった。その作品群の中で、広島原爆に取り組んだ唯一のものが『魔の遺産』である。綿密な取材をもとに書かれたこの作品に登場する広島大学医学部病理学の「柳川忠助」は、玉川忠太をモデルにしている。

鼻の下にちょび髭を生やした、小さな、風采のあがらない柳川忠助先生は、鷺鳥（がちょう）が首を絞められるような格好で、ネクタイと格闘しているところだった。…（中略）…「原子爆弾の話なら、わしはせんよ」と言った。

この描写について、先の杉原芳夫は「先生の特徴を、生き生きと表現している」と述べている。そして、柳川は「せんよ」と言いつつ、被爆者医療やケロイド、取り上げられた医学標本のことなどを飄々と話す。また、この作品はABCCのことに触れていることでも著名であるが、阿川は「柳川」にもそれを語らせる。

…あれが本来日本の為のものでなくて、アメリカの為のものだといふ事は、明明白々たる事実だが、世間では色々言ふだろうが、あんな大きな被害の、其のあとの調査に、日本では決してあれだけ大規模な組織立つた調査はできません。しもすまい。

実際の玉川はABCCについてのコメントを残していないし、アメリカには厳しい態度の印象があるが、実はこのように、冷静に見ていたのかもしれない。



6.玉川忠太、広島大学医学部に尽くす

なぜ玉川は広島に来たか。『広島大学医学部三十年史』によれば、1945（昭和20）年4月に広島県立医学専門学校を開設することが決まった際、校長その他教授陣は広島から最も近くにある岡山医科大学に依頼することにな



「広島県立医学専門学校 阿賀分院に移転した広島医専」（呉市阿賀町原）「アルバム 広島医科大学」昭和22年12月）広仁会 提供

ったという（この発言もまた喜多島健磨である）。岡山大学医学部の歴史は古く、もとより「東の東大、西の岡大」とも言われた名門だった。そして、そこに玉川がいた。広島大学医学部が原爆投下後からの広島とともにあって今日につながるように、玉川もまたその始まりの時期に、それらと共にあった。

医専の開校式は1945年8月5日に広島市内の皆実町の校舎で行われたが、翌日壊滅した。多くの学生と何人かの教官は前日夜に疎開先（甲立高林坊）に到着していたため救われ、玉川もそのなかにいた。その年の12月、玉川と病理学教室を含む医専は旧安浦海兵団跡に移転し落ち着くものの4月に焼失、1947年4月に呉市二河町に再度移転するもののこちらも焼失する。これらの再建のため、玉川を含む関係者は原子野を奔走する。そして1948年2月、呉市の海軍共済病院阿賀分院に落ち着くこととなった。玉川は単に解剖室にこもって原爆症に挑むだけではなく、実に闊達に、この原子野に向かっていった。

7.「おれは、三日たったら死ぬからな、ふん」 ～玉川忠太という人～

広島大学を定年退職した後の玉川は闘病の日々であった。そんななか、1970年11月3日に生存者叙勲で勲三等瑞宝章を授与される、と内示を受けた。それまでは元気でいたい、と言ったそうだが、死の3日前に次男に向けて発したセリフがタイトルの言葉である。10月30日に逝去。叙勲まであとわずか数日であった。最後まで玉川らしい。

昨年、玉川忠太の人生を追おうとしても広島以前のことはなかなかわからないと岡山の新聞記者が嘆いていた。しかし、広島での玉川の医学者、大学人としての活動は、残された記録と証言で生き生きと蘇らせることができる。証言には少し嫌悪感を含む場合もあるが、それでも記述せずにはいられない玉川の個性がそこにはあった。阿川弘之や蜂谷道彦の描写には、彼らの優れた筆致もあって玉川を楽しく想像させる。

8月28日…気軽で飄軽な玉川先生の来援で我々の部屋や食堂が明るくなった。夕食後の漫談、玉川先生が主演、岡山で罹災このかたの難行苦行を話つづけて食べる物すべてがおいしいおいしいといって上機嫌だ。話の途中で時々説教がある。お前らは贅沢だ、贅沢すぎる、こんなに食べてよいのか、などといって満足げに話し続ける。…私が話のカジをとると漫才のようなことになる。大学教授の肩書に気兼ねしていた連中も漫談一席で玉川先生、玉川先生といって親しくなってしまう。

蜂谷道彦『ヒロシマ日記』より

大学の混乱に苦慮するなか、病理解剖について熱く議論した翌日、掘立小屋の解剖室を建設し、翌日に最初の解剖を控えたその日の晩、被爆した人たちに「贅沢だ」と言って笑わせる玉川忠太。その業績と併せて考えると、そこには深刻な災害に立ち向かう科学者としての真摯な姿を見る思いである。

主要参考文献・資料 (パンフレット作成)

蜂谷道彦『ヒロシマ日記』朝日新聞社、1962年／法政大学出版局、2015年

阿川弘之『魔の遺産』新潮社、1954年

杉原芳夫「病理学者の怒り」より（山代巴『この世界の片隅で』岩波新書566、1965年、所収）

桜井俊二『広島郵政原爆誌』示人社、1984年

広島大学医学部第一病理同門会『広島大学医学部病理学第一講座開講50周年記念誌』同会、1997年

広島大学医学部創立三十周年記念事業会編『広島大学医学部三十年史』同所、1975年

広島大学原爆死没者慰霊行事委員会編『生死の火：広島大学原爆被災誌』同会、1975年

広仁会『広島大学医学部・広仁会～誕生と生い立ち～』（アルバムCD）

広島大学原爆放射線医科学研究所所蔵映像フィルム

資料展示「病理学者、原子野をゆく」パンフレット

編集 広島大学原爆放射線医科学研究所
附属被ばく資料調査解析部（久保田明子）

発行 2018年8月2日

発行 広島大学原爆放射線医科学研究所